



体育史上から見た体育の変遷について(2) :  
ルネッサンス期・近世,近代(前期)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清野, 市治 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3332">http://hdl.handle.net/10258/3332</a>

# 体育史上から見た体育の変遷について (2)

— ルネッサンス期・近世、近代 (前期) —

清野市治

## On the Change of Physical Education from the Viewpoint of the History of Physical Education (II)

— The Physical Education of the Renaissance,  
the 18th Century, and the  
Early 19th Century —

Ichiji Seino

### Abstract

In the second report, the author tries to elucidate what influence the physical education of ancient times and the middle ages had upon that of the Renaissance, the 18th Century, and the early 19th Century.

This paper is, moreover, a study to consider how the physical education of the Europeans, who lived in those active and stirring ages, progressed, and what remarkable contributions it made to the states and communities of those times.

### I. 緒 言

西洋の中世期を通じて「ソーマはセーマなり」として価値を見出されなかった身体は、ルネッサンス (Renaissance) を迎え、ようやく人間における血の通う正当な地位を回復しはじめた。歴史の重点はヨーロッパへ移り、体育も他の諸文化とともに長い沈滞とみられた不振の中世を終り、文芸復興のいわゆる「人間の発見」を契機として新しい息吹を吹き返して来た。中世において考えられた人間は、弱き人間、悪しき人間であった。ところがルネッサンスにおいて発見された人間は強い肉体をもった、生气潑刺とした健康な逞しい人間であった。ヨーロッパ人は他大陸の植民地化運動、国民国家形成

運動となり、また国家の内部においては啓蒙思想の運動、フランス革命、産業革命、近代化学の発達が進捗し、ヨーロッパ人はそれらの目覚ましい活動によって全世界を指導する地位に立った。この活動期に入ったヨーロッパ人の体育はいかなる経過をたどり、いかなる考え方に導かれて行ったかは、ルネッサンスから近世前期までと、啓蒙思想の発展およびドイツ哲学者の体育思想とますます体育の考え方が近代化し、全欧的にやがて世界的にひろまって、今日に至るのである。その基盤的思想体系が作り上げられたのが近世、近代(前期)であると考え。以下順次考察することにする。

## II. ルネッサンス期および近代の体育思想

### 1. ルネッサンスと体育思想

ルネッサンスの時代が、いつから始まりいつ終るかについてはいろいろの説があるが、中世から近世への過渡期として、近代がルネッサンスをもってはじまることについて各説一致している。ルネッサンスは、普通文芸復興と訳されているが、単なる古代文芸の復活を意味するだけでなく積極的な文化創造、人間形成を意味する。ルネッサンスの特色はいくつかあげられるが一言にして云えば中世的な束縛から人間を解放し、自然と人生を自由に探究しようとする意欲の最も強烈に現したことである。ルネッサンスの特色を上げると第1に古代ギリシヤやローマの社会を理解するための古典研究と古代体育法の発見研究となって現われた。第2には宗教的哲学的なものよりも、情緒的や感情や美の世界を追求した。それはイタリアにおける芸術の復興や人文主義思想の台頭となり、体育本位の教育法をときイタリアのザルツマンとも云うべきヴィットリーノ・ダ・フェルトレ (Vittorino da Feltre, 1378-1446) カララ侯の子弟を教育し自由教育を主張した。また体育の必要をといいたヴェルジェリオ (Pietro Paolo Vergerio, 1498-1565) はローマ法王の秘書となり、古代研究による体育論を発表した。ヴェジオ (Maffeo Vegio, 1406-1456) は「古代体育法」を著し合理主義体育の先駆をしたメリクリアリス (Hieronymus

Mercurialis, 1530-1606), スコラ哲学のアリストテレス主義に反対し, その訓練 (Dedisoiplines) で運動と遊戯についてのべたビーベス (Juan Luis Vives, 1492-1540) の業績となって発展した。第3に自然に対する方法的研究や現世的研究に関心が持たれるようになり, 新しい科学的研究や発明発見が行なわれ実学的思想となって発展した。第4に個性や個我を自覚し, 権力の意味なき圧迫に反抗した, これは宗教改革となってあらわれた。

ルネッサンス時代における体育思想の特色をまとめて見るとこの時代の人文主義者や人文的思想に立った宗教改革者は何れも青少年の教育に関してそれぞれすぐれた見解を發表し, 中には学校をおこして実践した人もいる。しかしながらそこにはいくつかの共通した点が見うけられる, 先ず第1に看取されることは, ギリシャの人間象を見つめ, ギリシャ的な体育を強調し, 身体的訓練と同時に道徳的, 精神的訓練を強調していることである。しかしながら単なるギリシャ体育の模倣ではない。第2に, 方法としては, 古代ギリシャの体育運動のみでなく, 初期のローマ人や騎士の間で行なわれた各種の運動を多く採りあげている。第3に甚だ鍛錬的であり, 激しい戦場生活との関連において考えられた。第4に人間性の解放に立った教育であった筈でありながら, 女子体育について何等の見るべきものがなかった。即ち体育運動に対する中世キリスト教的な偏見は先ず男子の場合において放棄されようとしたのであるが, 女子については尚数世紀を待たねばならなかったと云える。

## 2. 実学的思想家の体育思想

人文主義に立った人々や宗教的改革をとらえた人々は, 歴史をかえりみて現実の実際生活の欠陥を考えたが, 実学的思想家達は, より一層実際的な経験に訴えて実用的な社会生活の重要性を力説した。モンロー (Paul Monroe) はこの一派の思想家を更に人文的実学主義, 社会的実学主義, 感覚的実学主義の三つにわけて考えている。

(1) 人文的実学主義は古典を教材とする点で人文的ではあるが, 形式よりも内容の習得を主眼とする点で実学的である。これに属する思想家にイギリ

スのアスカム (Roger Ascham, 1516-1568), フランスのラブレール (Francois Rabelais, 1483-1553), イギリスのミルトン (John Milton, 1608-1673) 等がいる。中でもラブレールはその諷刺小説「パンタグリュエール」(Pantagruel, 1533) および「ガルガンチュア」(Gargantua, 1535) において言語の形式的訓練に偏した中世的な教育を鋭く指摘し、宗教、道徳、科学、体育各般にわたる教育の必要を説いた。彼の思想はモンテーニュ、ルソーに大きな影響を与えている。

(2) 社会的実学主義は、書物による教育を排斥し、社会生活の実際経験を教育の主要内容とする点で近代的である。その代表的人物モンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne, 1533-1592) は彼の「論文集」(Essais) の中で古典偏重の人文主義に反対し、教育の目的は心身共に健全な騎士をつくることにあるとして体育の必要性を力説している。

(3) 感覚的実学主義は児童の天性を尊重し感覚的直観を重視した。これに属する思想家は、マルカスター (Richard Mulcaster, 1532-1611), コメニウス (Johann Amos Comenius, 1592-1672) 等がいる。マルカスターは「位置」コメニウスは「大教授論」の著書があり、とりわけコメニウスの教育案の中で、遊戯と体育的な運動を採用するとともに体育のクラス経営を試みている。それで後世彼を「学校体操教授の父」と呼んでいる。彼の教育説の原理や方法には今日においても参考となるものが少くないが、その表現形式には、まだ当時の宗教的色彩が多分に含まれている。それは彼が完全な地上の生活を営むことが教育の第1の任務であると説きながらも、その最高目的は天国に入り神の世界で永遠の幸福をうけることにあると述べていることでも理解できる。

### 3. 啓蒙時代の体育思想

文芸復興、宗教改革の大波がすぎると、時代は啓蒙思想の18世紀に入っている。啓蒙 (英 Enlightenment, 仏 Emancipation, 独 Aufklärung) とは伝統からの拘束を脱して自由な知識を普及させ、民衆を迷信無知から解放しようとする

ことである。理性の尊重と批評的精神を伴うものである。それは、イギリスにはじまり、フランス、ドイツに波及して行く大きな思想的運動で、まずイギリスのロックにはじまり、フランスのヴォルテール、ルソーを経て革命を誘発し、ドイツは少しおくれるがカントはそのよい意味の完成者であった。体育は18世紀末にドイツのバセダーが体育を組織的に学校体系のなかに再興させるまでに秀れた思想家達によって強調されなければならなかった。丁度この啓蒙思想の展開のさ中で啓蒙思想家達が古い習慣を一掃しようとする新しい息吹の中で、体育は幸運にも彼等の関心の中に正当に位置づけされた。ロックにおいてもルソーにおいてもそうであった。このことは体育思想上大きな意義があったと思う。それはヨーロッパが中世を真に離脱した時に、身体育成への配慮がギリシャの方向に復していったという事実があるからであり、このことが現代体育を考える場合極めて重要な点であると考えている。日本も東洋一般も、精神鍛錬はその歴史と風土の中で少しもおろそかにすることはなかったが、身体育成への配慮の具現化の欠如という点では東西の間の差が大きくなったと思う。ヨーロッパ近世体育思想が、その根源乃至理想としてギリシャを考えていた点特に重大な意義があると考えている。この時代の代表的な人物の思想を考察して見る。

### (1) ロックの体育思想

ジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) の教育論は若き紳士の育成であった。彼はその頃の支配的勢力となってきたイギリスのブルジョアジーの教育観を代表していたのである。根本の認識論において、人の心ははじめ白紙のごときもので、経験によってのみ観念は与えられ、経験に先立つ認識はないとするものであり、ここに教育の可能性を確信させる見解がみられるのである。そして当時の因習的な古典的な知識の詰込み教育を排し、道徳教育と身体育成(体育)と知的教育を重視し、特に家庭教育を学校教育よりも重視したのである。彼の体育観はまず身体育成、すなわち体育を教育論の最初第1章で取上げている。それは鍛錬主義に立ち、健康教育的な考えがむしろ基調になっている、即ち教育において身体と精神乃至性格とが肩をならべて考える

のは現代的な考え方であり、さきにモンテーニュが示した見解と大体同一の考え方に立つものとみられる。ロックの身体育成の目標と具体的プランについて簡単にのべれば鍛錬主義は彼の方法論の原理であるが、目的は何かといえばそれは健康 (health) であり体力 (strength) であるといえる。その目的のために彼が親達の注意を喚起した諸事項をまとめて見ると次のように要約することができる。

- a. 戸外の空気を十分吸うこと (冬でも火のそばに近よらせぬこと。)
- b. 運動すること (水泳はよい。走り廻って体があたたかくなっている時、冷い飲みものを急にのんだり、地面に座ってはならない。)
- c. 睡眠 (ベットは堅い方がよく、早寝早起の習慣をつけ、7~14歳の間8時間睡眠をとること。)
- d. 食事 (あっさりしたものがよい。3~4歳頃までは肉はさげよ。)
- e. 飲酒 (ぶどう酒やお酒は飲ませないこと。子供の飲み物は弱いビールだけにすること。)
- f. 薬 (薬はほとんどか、全く飲まないこと。)
- g. 衣服 (あまり暖い衣服や窮屈なものを着ないこと、特に少女のコルセットは狭腰や腰まがりになるから注意すること。)
- h. 冷水 (頭と足は冷しく、足はしばしば冷水で洗うこと。)

体育的の問題のつぎに知育と徳育を考えた教育論であった。彼の教育論は後世への影響は大きい。彼の全体としての構想を考えると体育・知育・徳育においては後の H・スペンサーの教育思想の先駆となり、内容的には特にギリシャ・ローマの体育思想とその再興であるルネッサンス期のそれを伝え、その鍛錬主義的方法はモンテーニュからルソーへ至る線上にあるとみられる。そしてユベナーリス「祈るなら健全な精神が健全な身体にあることを」の句を近代から現代へ伝える際の橋わたしとして役割を果し、体育思想史的意義は非常に大きいものがあったと思う。

## (2) ルソーの体育思想

ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712-1778) が近世ヨー

ロッパの歴史で果たした役割は頗る大きいことはいうまでもないが、教育思想史における役割についても同様である。ただ体育においてはその体育思想として意義あるばかりでなく、特にその著「エミール」にあふれる教育的情熱がよくあらわれパセドーが実践活動に踏み切るための導火線となっている。ルソーの身体観と体育観について考えて見ると先ず身体観は精神の命令に従うためには十分強壯でなければならない。身体は精神の忠僕となるためには強壯なことが必要だという所にソクラテス以来の精神の下僕としての身体という見解がみられる。そして虚弱な身体は精神を弱くする。そこで薬がはばを利かすことになる。これが人間に非常な害を及ぼすのだという考えに連なっている。ルソーはロックと同じ様に薬の使用に反対する立場に立っている。当時の医学(前近代医学)の現状からみてある程度真実であると思われる。それは真の医学は次のように考えられていた。医学の中で唯一の有益な部分は衛生学である。しかも衛生学は科学というよりもむしろ道徳である。節制と労働とは人類の真の2人の医者である。労働は人間の食欲を増進し、節制は暴食を防ぐ。この考え方はもちろん文字通りではないがなかなか急所をいつていると思う。次にルソーの体育観について考えて見ると幼い頃は十分に遊びまわることが強調している。運動をすることが大切であることを説くのは、それが知的に精神的に大いに役立つと考えたからである。「子供は全生涯の中で2度と幼年時代ほど忙しいことはないだろう、プラトンは極めて荘重な教育論だと思われている、(国家篇)の中で、ただお祭りや、遊戯や歌や娯楽だけで子供らを教育している。彼は子供らに十分遊ぶことを教えてしまえばすでに目的を達したつもりだと思われる位だ」と遊戯の有効性をのべている。ルソーの体育思想の中心点は恐らく次に述べる引用文の中にあると思われる。「子供の判断力は体力に応じて発達してくる。彼の体力が自己保存に必要な以上であり余るようになるまでは、他の目的のためにこの余剰の力を用いるための真の思考力は発達しない。そこで諸君が生徒の理知を開発しようと思うならば、理知が制御すべき体力を養わなければならない。生徒を賢明にしようと思うなら彼の身体を絶えず運動させ、身体を強健にしてやらね



ばならぬ。彼を働かせ、彼を活動させ、走らせ、叫ばせ、絶えず運動させよ。先ず彼を体力において大人にせよ。そうすればやがて彼は理性においても大人になるであろう。」この考え方は今日においても極めて大切なものと思う。今日体力のあることを余りにもスポーツ選手の体力と考えられ、普通の人からかけ離れた体力であると思っているが、われわれはルソーのこの考え方に立ちかえて反省する必要があると思う。ヨーロッパはルソーによって近代的な体制へと急激に活動を開始するのであるが、体育も彼の「エミール」の呼びかけで学校教育の実践がドイツではじめられるのである。それ故ルソーの体育史乃至体育思想史上における意義は頗る大きいと考えることが出来る。

### III. 近代体育の発展

18世紀の体育は思想としては、まことにはなやかな展開をみせたけれども、多くは単なる思想として止まり、時代を動かすような実践として発展したわけではなかった。それ等の思想が一つの教育思想としてまとめられて実践に移され、名実共に近代体育として発展するようになったのは、実にドイツ汎愛派の教育者達の努力の結果と云わねばならないと思う。

#### 1. ドイツ汎愛派の体育思想

汎愛派の主班バセドウ (Johann Bernhard Basedow, 1723-1790) はモンテーニュの世界主義思想およびコメニウス、ロックの思想の下流にたち、特にルソーの影響を強くうけて教育に一大改革を与えた。彼はルソーのように知識の教授よりも意志の教育に重点をおき、モンテーニュのように人間を全体としてながめ、精神と身体の両面に注意した教育を力説し、実学主義思想をうけて、教材は「必要」の原理から選び、その学習指導は遊戯的でなければならないと主張した。従って彼は特に体育を重視し、体育以外の学科の学習も、従来行なわれてきた体罰を伴う注入形式のかわりに、骨の折れない遊戯的気分に関わりながら行なわれる愉快的な学習法をとった。彼は1774年にデッサウに汎愛学校を建てたが、ここで行なわれた運動は古代ギリシャで行なわれた体育的運動や、従来ドイツで行なわれてきた騎士的な運動などから選ばれ

た。所謂デッサウの五技とは、疾走、跳躍、登はん、平均、運搬の運動であった。その他に球技や九柱戯(球をころがし棒をたおす遊び) 輪廻しなども行なわれた。運動の指導に当たったのはシモン (Johann Friedrich Simon) およびドウ・トア (Johann Toko du Toit) であった。デッサウの体育はザルツマンによってシュネツペンタールに移され、グーツムーツによって大成された。ザルツマン (Christian Go-Salzmann) は 1781 年デッサウ汎愛学校の宗教の教師になったが 1784 年シュネツペンタールに汎愛学校を建て、学校を家族的に組織し「健康で理性に富み、善良で快活な人、個人として幸福であると同時に同胞の幸福を進めることのできる人」を目標として教育し、生徒から「父ザルツマン」と慕われ、非常な成功をおさめた。ここで行なわれた運動はデッサウの運動を中心として発展させたものである。体育の担当者は、最初はザルツマン自身であったが、後にアンドレ (Carl Andre,) グーツムーツ、レンツ (Christian Ludwig Lenz, 1760-1833) が指導した。次いでグーツムーツ (Johann Christian Friedrich Gutsmuths, 1759-1839) が恩人リッター医師の遺児二人を伴ってシュネツペンタールを訪れたのは 1785 年であった。その翌年からここで体育の指導を担当し、殆んど死ぬ直前まで約 50 年を体育のために捧げた。彼こそは近世体育の父と呼ぶに最もふさわしい人物である。

## 2. グーツムーツの体育思想

グーツムーツ (Johann Christian Friedrich Gutsmuths, 1759-1839) について彼の思想をのべると第 1 の主著「青年の体操」(Gymnastik für die Jugend 1793) を見ると、その説くところ必ずしも斬新とは云えないが 18 世紀のもろもろの体育思想を一つにまとめあげたところに特色を見出せる。彼は精神の陶冶を無視した唯物主義、身体運動を卑下した敬虔主義の欠陥を鋭くつき 18 世紀が一方的に内面的な人間をながめたり、個性の啓発と感覚の深化に努力したことは誤りであって、われわれは身体と精神の調和を求めねばならないと主張している。そうかと思うと「われわれは信じられないほどわれわれの身体へ依存している。われわれは身体がなしうることだけを欲する」と唯物

主義の片鱗をほのめかし、またルソーのエミールから多くの文章を引用している。更に健康で強靱な英雄像を想像し、古代ドイツ人の勇気、沈着、忠誠をたたえ、将来の人間性「精神文化と結合した身体の完全」を企図すべきであると述べている。彼はこのような思想に立って「われわれは計画的な体操によって男性的な強さをもった、健康と忍耐、勇気、沈着が融合して男性的な人格となって現われるような状態に青年を導く」ことが最も大切だと考え、男性的性格の育成こそ彼の体育の目標であった。このような目標達成のために、彼がとりあげた運動は自ら意志に向けられたもの、即ち敏捷と耐久に向けられたもののみであった。正しく、彼の体操は、本質的に意志中心の体操であった。にもかかわらずそれは常に「若々しい喜びの上衣をつけた作業」(Arbeit in Gewande Jügendlicher Freude) でなければならなかった。ここに彼の体操に近代性があるのである。したがって古代体育を近代的な解釈のもとに行なったものと見るのが正しいと思う。具体的に実施した種目を見ると古代ギリシャの五技を含む多くの運動であった。(跳躍、疾走、投擲、レスリング、登はん、平均運動、重量挙、運搬、ステップ、ダンス、散歩、軍隊教練、水泳、朗読、感覚訓練) 運動実施の注意として食事の後は消化するまで運動してはならないとか、余りやり過ぎてはならないなど細部の注意を与えている。またどの筋肉が柔弱かをみて、それに対する特殊訓練をさせることも実施した。彼の著作は当時として誠に驚くべき速さで全欧の各国語に翻訳され、普及して行ったのである。この一事でも体育の必要がようやく強く認識されてきたことを十分物語っているといえる。この背景には教育的な考えの伸展とは別に、各国の軍事的要求も非常に大きかったことを見逃すことができないと考える。グーツムーツは50年という長期にわたって専任体育教師をつづけた。その偉業に対して彼を先にのべたように「近代体育の祖」とたたえるが、実に彼の不断の体育のための努力によって今日の体育は教育の1領域としての位置を獲得する端緒ができたのである。歴史の古い東洋や日本の教育において体育という点でヨーロッパの教育との差が大きく開くことになるのはこの時点からであり、それが日本に輸入されるまでには僅か70年

程のことであったことも記憶されるべきことといえよう。

### 3. フィートの体育思想

フィート (Gerhard Ulrich Anton Vieth, 1763-1836) はグーツムーツと同じくその不朽の体育文献によって体育史上忘れてならない人である。彼は、1798年ドイツのデッサウ侯立本校の校長となり、極めて博学多識で、特に数学、物理学、歴史学に造詣が深かった。彼の著者「体育百科全書」は3巻から成り第1巻は「体育史稿」第2巻は「体育の体系」第3巻は第2巻の附録で音楽と八個の銅版を含んでいる。彼の体育史は歴史書としておそらく最初のもともまりある体育史である。殊にその文化史的な研究や、土俗学的な叙述は今日でも参考となる点が少ない。また「体育の体系」の中で取扱われている運動の説明も甚だ科学的であり、しかもその叙述は、生き生きとし、心からの暖かさやユーモアをもってなされている。ただグーツムーツが常に運動の練習法やその必要効果をといたに対してフィートは技術方法の説明を中心とした。同じ時代に、共に体育に対して卓越した見識を持ちながら一方は近代体育の祖として当代並びに後代の体育の方向を決定するほどの大きな影響を与えたに対し他方は当初殆んど世人の注目をうけずにいたのはなぜであろうか、1つにはフィートの理論は彼自身による実践指導のうらづけがなかったこと、2つには時代の必然性を認めないわけにいらなかった。即ち百科全書的な体育知識ではなく合理主義をはるかに越えた主意的実践体育の時代であった。以上のことから考え時代にとり残された点であると思う。

### 4. 国民的政治的体育の発展

#### (1) ナポレオン戦争とドイツ国民体育

近代ドイツの体育は、宗教的権威に抗して人間性の尊厳を主張し、純粋に教育の要件として発達したのであるが、戦争という事実と直面することによってその様相を変えない訳に行かなかった。こうした事実はペスタロッチやフィヒテ、フレーベルの思想の中に断片的に見られる、またグーツムーツもヤーンと交渉をもつようになってから明かに思想的変化が見られる。即ちグーツムーツはヤーンの「ドイツ体操術」(Deutsche Turnkunst) が出た翌年の

1817年に「祖国の子弟に寄せる体操書」(Turunbch fur die Subne des Waterlandes)を公にし、ギムナスティックの語を捨ててヤーンがはじめて使用したツルネン(体育)の語を使用した。彼の前著「青年の体操」とこれを比べてみると、その表題そのものがすでに内容の相違を物語っている。その緒言にもある通り、本書の目的は、祖国防衛者を準備するにあたって、身体を考慮した普遍的陶冶は問題でなかったのである。グーツムーツはツルネンと云う言葉を軍隊体操、兵式体操と曲解し、教育体操としてのギムナスティックと対立させた。彼はまた兵式体操に熱中し「体操問答」(Katechismus der Tnrnkunst)を公にした。当時ドイツでは「一切の州居住者は生れながらの州防衛者である」(1807年の兵制改革案)という国民皆兵思想の風靡した時代であった。しかもグナイゼナウ將軍の建策妙を得てブリュッヘルがワーテルローにナポレオンを撃破して軍国思想の高潮した時代で、体育が軍人教育と密接な関係におかれたことは不思議ではない。当時の思想家であったフィヒテ、ヘーゲル、フンボルトなど何れも軍事教育に同調していた。こうした傾向はドイツだけのことでなく、19世紀以後の欧州諸国の体育は、殆んど何れもその当初において軍隊教育と密接な関係におかれていた。

## (2) ヤーンの体育思想

ヤーン(Friedrich Ludwig Jahn, 1778-1852)の体育思想はナショナリズムの体育思想の1つの典型であった。その主目標はドイツの青少年に祖国解放のための道徳的、身体的能力を養うことであった。それはすでにフィヒテが提起した国民教育の課題に合致している。そして、このため軍事的な目的をグーツムーツの場合よりも一層強調することになるが、これを過大評価してはならない。ヤーンは単に軍事的、美的、あるいは健康の立場から体育を行なうとは考えなかった。彼は「理性的に思考し、人間的に感じ自立的な存在である真の人間のための教育があくまでも不可欠なのである。総体的人間の調和的な形式のみがすべての人々の身体と精神の奇形と歪曲を防ぐ」と述べている。ツルネンは完全な人間性に至る道程、手段であった。彼にとって体育を意味するギムナスティック(Gymnastik)という用語は外来語であった

そのため「ドイツの言葉でドイツの事物を、ドイツ語でドイツの価値あるものを名づけることは争う余地のない権利である」とすることによってツルネンという用語を選んだのであると語っているが、彼のロマン主義の一面でもある。また彼のナショナリズムは自由主義、民主主義と結合している。彼は国民性が自由においてのみ発展するとした。自由の意志は共同体の意志に従属しツルンクンスト (Turnkunst) はその結合手段であり、これは信仰や出身地や身分のちがいをとりさってしまおうとする。このことは共通の服装を規定したこと、お互に君 (Du) というように身分的差別のない呼び方をするようにしたこと等は彼の共同体意識の育成の意図とともに民主主義、あるいは平等主義の志向を見出すことが出来る。体育場 (Turnplatz) はすべてのドイツ人の結合に至る橋であった。そこで道徳的真面目と厳格を前提として、生き生きと、自由で、楽しく、敬虔に、ということを標語として、歌を歌ったり、遊戯をしたりして共同意識を強めようとしていた。ヤーンの行なった運動ではとくに器械体操の面での発展が著しかった。また新たに鉄棒や平行棒を創出し、また木馬運動等の外に懸垂、登はん、投、牽引、押し合い、拳上、運搬、伸展、レスリング、輪跳び、縄跳び等が実施されとりわけ国民運動としては走、跳、投を行なった。これらの中にはグーツムーツやフィートと同様のものもみられる。更にこれに水泳、徒歩旅行 (Wanderung)、体育祭や地域の集会のような行事的形式のものがあつた。ヤーンのツルネンは近代体育の一つの潮流として特にヨーロッパ大陸内で大きな発展をとげた。

## 5. 合理的体育の展開

### (1) リングとスウェーデン体操

リング (Pehr Henrik Ling, 1776-1839) はグーツムーツの体育をヤーン、ナハテガルと共につがれ、それぞれドイツ体操、デンマーク体操、スウェーデン体操として発展させた。この三者は時代を全く同じくし、殊にヤーンとリングは、共に牧師の子として生れ、古代神学を学び、次いで言語学研究に身をゆだねた、その間民族精神と祖国の歴史と伝説を研究し祖国の悲運をなげき、祖国再建のために民族的統一を考えた、偉大な愛国者であつた点 (特

にリングの場合、その作品の故スウェーデン学士院賞を授けている) 全く軌を一にしている。即ちヤーンが大ドイツ国建設を終世の理想として追求したように、リングも亦スカンディナビヤ諸国を一体とする大北方連邦結成の夢をもっていた。共にその民族を愛し、強健で戦闘能力のある国民を育成しようとして、それぞれ独自の民族的な体操を考案したのである。このようにその終局目的から見れば、リングの体操もヤーンの体操と同様に、明かに国民的政治的な性格を内在していると云えるが、しかしながらその直接目標並びにその目標を達成するための方法的原理について見ると両者は完全に相異っている。ヤーンの体操がどこまでも主意的であったに対して、リングの体操は生理学、解剖学、生物学等を基礎として構成され、主知的、合理的であった。彼は体操を教育、医療、兵式、美的の4部門に分けたが、実際に行なわれたのは、三者だけで、美的体操は発展しなかった。三者の中でも兵式体操は、剣術、銃剣術等の運動から成りスウェーデン体操として特色のあるものではなかった。スウェーデン体操として最も特色があり、発展したのは教育体操と医療体操であった。彼は体操を、器械を使用するものと使用しないものとに分け、器械を使用しない運動は更にこれを能動的な運動と受動的な運動に分けた。能動的な運動の中には、屈伸、捻転、回転等の運動があり、受動的な運動の中には、圧迫、摩擦、振動、打撃等の運動がある。彼が教育体操として行なった運動を身体の部分で示してみると体、頭、上肢、下肢の4である。彼はこれらの徒手体操を非常に強調した。リングによると、われわれは簡単な筋肉体操によってのみ普遍的に身体を修練することができるとし、要するに彼の偉大な功績は、彼自身が謙虚な態度をもって「神よわが試みをして未来に栄光あらしめたまえ」と念じているように体操に科学的な根拠を与えようとしたその努力と態度にある。彼は体操の理論としてよりも、実践家として名を留むべき人である。彼の体操のうち教育体操は、子のヤルマーリング (Hjarmar F. Ling, 1820-1886) やテルングレン (Lara M. Torngren, 1839-1912) バルク (Victor G. Balck, 1844-1928) 等によって、医療体操はブランチング (Lars G. Branting, 1799-1881) ゲオルギー (Carl A. Georgii,

1808-1881) ハルテリウス (Trul J. Hartelius, 1818-1896) 等によって逐次大成されていった。スウェーデン本国におけるリングの体操即ちスウェーデン体操は「王立中央体操学校」(Kongl. Gymnastiska Central Institutet) (1814年創設)の前記指導者達を中心として発展したのであるが1840年代ロートシュタインによってドイツに伝えられ、ドイツ体操と理論闘争を展開し1849年にはゲオルギーによってイギリスに伝えられ、1880年代にはデンマーク、アメリカに、1902~3年の頃には日本に伝えられるなど各国の体育界に堅実な地歩を占めて発展した。

## (2) リング体操の発展と平行棒論争

a. ドイツにおけるリング体操の発展： 先ずドイツについてみると、スウェーデンに留学し、後陸軍の体操教師養成を目標として1848年に創設された「王立中央体操教師養成所」の最初の主任教授となったロートシュタイン (Hugo Rothstein, 1810-1865) は専らリングの体操に傾倒し、ヤーンの体操を攻撃した。彼こそは合理主義体育の権威者で、リングの最もすぐれた代弁者とも云うことができる。もっともロートシュタインもヤーンの意図した事については正しく理解しており、ヤーンが「ドイツ国民性」の中で鋭い情熱的な、しかも適切な言葉でそれを表現していることについては認めている。しかし彼によれば「鋭いこと、適切であること、情熱的であることは必ずしも正当であるとはきまらないとし、ましてや、それが真理であるかどうかは疑わしい。特にツルネンは目的をも方途をもまた内容をも外形をもたない無意味な技術であり科学と何等の關係のない、従って価値のない、空虚で未熟な経験に基づく、単なる技術にすぎないと考えている。ヤーンの「体操術」は詭弁哲学である。「ただ詭弁哲学の媒介者は思想であったが、これに対して体操術の媒介者は身体である。従って体操術は身体的詭弁哲学であり詭弁哲学は思想的体操術である。」「身体はもともと一つの有機体即ち一切の器管がそれぞれ独立した活動を営みながら他の諸器管と互に影響し合い、依在し合っている生命的統一体であるが、ツルネンの指導者達はこの事実を少しも考えていない。」こうした事実は特に平行棒運動に見られる。平行棒は様々の運



動を行なわせようと考えて考案したものであるが、平行棒での運動は実際生活の中には存在しない性質のものであるとし、ロートシュタインは、グーツムーツやヤーンが重視した運動能力（作業能力）の価値を全然認めず、また競技についても、それは功名心を基調とするが、功名心は一切の悪や不道德の根源であり、社会秩序を破壊する性質をもっていると主張し、ツルナー（体育家）と不良少年とは同義語であると諷している。このようにヤーンの体操に対して少しも長所を見出さなかった彼が、1842年以後プロイセンに台頭してきたツルネン復活運動に真向から反対したことも決して不思議ではない。ただ一群のヤーンの後継者の中で最も傑出していたシュピースに対してロートシュタインが非常な尊敬をしていたことは、シュピースの体操が、ひとしくツルネンという名辞で呼ばれていたにしても、それはヤーンのツルネンとは根本的に性格を異にした点であった。

b. 平行棒論争： ヤーンの体操に対するロートシュタインの否定的な態度、特に平行棒運動をもって青少年教育上有害であるとする彼の所論は、ヤーン体操を支持する人々の反感を招き、ロートシュタイン派とヤーン派との間に激しい理論闘争が行なわれた。1858年以来世界的生理学者としてベルリン大学教授の要職にあったデュ・ボア・レーモン博士は、1862年「平行棒体操並びに所謂合理的スウェーデン体操」(Über des Barrenturnen und die sogenannte rationelle Gymnastik) を発表し「リングがその体操体系について挙げた立証は真面目な意味での所論ではない。彼の著書を一読したものは、彼の所論が、25年間ドイツの科学を圧迫してきた幼稚な自然哲学にすぎない」と述べた、これに対するロートシュタインの抗議に答えて、その翌年「ロートシュタイン氏と平行棒」(Herr Rothstein und der Barren) を発表し、「該書の解剖学、生理学の附録は全然無価値である」また、その生理学についても「平凡な観察と陳腐な意見を述べているが、その科学的批判は正当でない」と手きびしい批判を与えている。両派の争は1862年、プロイセン政府が発表した体操教授入門書に平行棒と横木の運動が省かれていたために一層問題を大きくしたが、政府の構成した医事委員会の審議の結果、ツルネン支持派の

勝利となった。しかしこの論争はドイツ体操そのものの理論的解明に少なからず貢献した。この論争によって従来殆んど無批判無反省に行なわれてきたドイツ体操の特質と欠陥が解明せられ、その科学的研究に一つの時代が画された。

c. ロートシュタインの影響：彼の体操理論や実践は体操の医療的効果に対する認識を深めた。如何に彼の影響が大きかったかは、時代の影響があったとしても、平行棒論争後20年~30年間というものは意志修練を体育の目標として語るものが無く、専ら治療的効果が力説され、かつ応用されたことでもわかる。更にまたロートシュタインがその著書や行動によって多くの医師を、何等かの形で体育運動に動員したことも、大きな功績とせねばならない。彼の体育は学校体操とし敗れ去ったが軍隊においては、その後半世紀の長い間に亘って実施された。平行棒論争後約50年スウェーデン体操は50年の間に多くの指導者達によって完成されたし、ドイツの側にあっても、ロートシュタインのようにドイツ体操の基盤を放棄してまでスウェーデン体操を迎えるものは居なかった。この新しいスウェーデン体操に対して、当時ドイツ体育の理論的指導者であった、シュミット (Ferdinand August Schmidt, 1852-1929) は「われわれは、われわれの学徒の体育をすすめていく上に、ドイツ体操の基盤を放棄せずに、スウェーデン体操から多くのものを学び且つ受取ることができる。」と述べている。このことは産業革命と平行して近代文明が生んだ幾多の身体的障碍に対するスウェーデン体操の保健医療的効果を十分認識し、合理的体育は主意的体育と相反するものではなく互に補足し合うべきものであることを明かにしている。ことに新しいスウェーデン体操は女子の体育に重要な役割を持つようになった。

### (3) デンマークにおけるスウェーデン体操の発展

デンマークにおいては最初ナハテガル (Franz Nachtegall, 1777-1847) によってグーツムーツの体操が行なわれ、後ヤーンの体操が加味された。それはドイツ式の系統のものであったが、1880年スウェーデン体操の移入と共に、漸次スウェーデン化されて今日に至っている。1904年デンマークの体育視学

となったクスドセン (Knud Ånton Knudsen) の「体操教科書」(A. Textbook of Gymnastics) の如き純然たるスウェーデン正統の体操である。彼の著書は 1926 年 (大正 15 年) の「日本の改正学校体操教授要目」作成に当って多くの参考資料を提供している。1936 年の「改正学校体操教授要目」の体操やその後のわが陸海軍の体操に多大の影響を与えている。ブック (Nils Bukh) の基本体操もスウェーデン系統に属する合理的体操と云ってよい。

#### (4) イギリスにおけるスウェーデン体操の発展

イギリスに渡ったスウェーデン体操はどうであったか。最初ドイツ系 (特にグーツムーツ風の) の体操が、陸海軍の諸学校を中心として行なわれていたが、スウェーデン体操が伝えられてからもそれと併行してマクラレン (Archibold Maclaren, 1820-1884) の体操が行なわれていたが新味に之しく、あまり好評を博さなかった。これに反しスウェーデン体操は徐々にではあるが婦女子の間に普及していった。即ち 1878 年には女教師のためにスウェーデン体操のコースがロンドンで開かれ 1903 年にはスコットランド文部省が学校職員に対し、スウェーデン体操に基づく新しいコースを開設するよう奨励した。その翌年にはイングランド学務局もスウェーデン体操に基づく「体育要目」を公にした。その後スウェーデン体操は、イギリス海軍でも採用されるようになった。このようにしてイギリスでは単に教材の方面だけでなく、その指導をもスウェーデンやデンマークに求めるようになった。

#### (5) アメリカにおけるスウェーデン体操の発展

アメリカ人は 1850 年イギリス人の書いた本を通してスウェーデン式医療体操を知った。1860 年にはアメリカ人テラー兄弟 (George H. Taylor, Charles F. Taylor) がそれぞれ「スウェーデン式医療体操解説」(An Exposition on the Swedish Movement Cure) 及び「医療体操の理論と実際」(The Theory and Pracice of the Movement Cure) を公した。リングの遺著「体操の一般的原理」が出てから 10 年後にアメリカ人はスウェーデン体操を知ったのであるからヨーロッパ諸国に比べてあまり後れていない。医療体操に比べると教育体操は、余程おくれてアメリカに紹介されている。アメリカでスウ

スウェーデン式教育体操が実際に行なわれるようになったのは1880年代である。即ち1883年ワシントンのスウェーデン式「健康学校 (Swedish Health Institute) の校長ハルトウイヒ・ニッセン (Hartwig Nissen) がフランクリン校で行なったのが、アメリカでスウェーデン式教育体操を実施した初めである。しかし厳密に云ってスウェーデン体操が与論に問われ、一般の注意をひくようになったのは1889年以後のことである。ドイツ体操とスウェーデン体操の論争はアメリカでも行なわれたが1892年の調査によると、272の重要都市を通じて、初中等学校における体操実施状況は、次の通りで、ドイツ式体操を採用しているもの41%、スウェーデン体操を採用しているもの29%、その他30%となっている。スウェーデン体操がドイツ体操よりも劣勢にあるのはドイツ体操がスウェーデン体操よりも、遙かに早くアメリカに紹介され、早くから学校方面に計画的に実施されていた結果と考える。しかしアメリカにおけるスウェーデン体操は一応19世紀と共にその役割を果し、体育法としての主動性を遊戯やスポーツにゆずらねばならなかった。児童、生徒の自主主動性を尚び、その社会性に重点をおくアメリカの教育において、号令によって形式的動作を一斉に指導するスウェーデン体操が主動性をとりえないのは当然のことであった。スウェーデン体操だけでなく、それ以前に行なわれたルイスの体操も同様の運命をたどっている。しかしこのことは、アメリカにおいて科学的な体育法が栄えなかったことを意味するものではなく、そこにはスウェーデン体操がもっていた生理学、解剖学だけでなく近代的な心理学や社会学その他の広い科学の基礎の上に、より一層科学的な体育を展開しようという努力のあることを考える必要があると思う。

#### (6) 日本におけるスウェーデン体操の発展

ニルス・ポッセの著者「特殊運動学」(Special Kineciology)は1902年(明治35年)アメリカから帰朝した川瀬元九郎氏によって「スウェーデン式教育体操」「スウェーデン式体操」として紹介された。またボストン体操師範学校に学んだ井口あぐり女史が1903年(明治36年)帰朝してスウェーデン体操を指導した。スウェーデン体操の思想は後のリーランドの体操の背景をなして

いたが、教育体操としてまとまった形で紹介されたのはこれが最初である。その後永井道明氏が欧米の体育を研究帰朝し、学校体操としてスウェーデン体操の卓越性が確認され、永井氏の原案によって、スウェーデン体操を中心の「学校体操教授要目」が制定公布されたのである。その後九州大学医学部の桜井恒次郎博士の学理的な協力と相まって発展し、学校ばかりでなく軍隊においても採用された。その後スポーツ、遊戯、武道等の学校体育教材の進出その他の理由で、「学校体操教授要目」は1926年(大正15年)、1936年(昭和11年)にそれぞれ改正され、遊戯、スポーツ教材が漸次形式体操の領域に進出するようになったにも拘わらずスウェーデン体操は依然として、学校体育の中心教材の一つとしての位置を失なうことが無かった。昭和3年11月からはスウェーデン体操はラジオ体操としてとりあげられ、民間、学校を通じて行なわれるようになった。

#### IV. 第2報のまとめ

ルネッサンス期と近世および近代(前期)の体育の発達は著しいものがあった。それはルネッサンス期を中心としての体育および諸文化に対する新しい感覚と、また近代体育発足の芽生えがあった。特にドイツの汎愛派の体育と、イギリススポーツの系統で、現代体育の基礎的な素地を作り上げた意義ある年代と考える。18世紀(前半)の体育は思想としては、まことに立派なものであったが多くは単なる思想としてその時代に反映したが、時代を動かすような実践として発展しなかった。それ等の思想が一つの教育思想としてまとめられ実践に移され、名実共に近代体育として発展するようになったのは、ドイツ汎愛派の教育者達がその発端となった。更にドイツ体操、ツルネンのヤーンは近代体育の一つの潮流を作り上げた。またリングのスウェーデン体操も世界的に広く普及し今日においても尚採用されている点偉大であると云うべきである。わが国において体育という概念は明治5年(1872年)「学制」が公布されて教科名が初めて「体術」で翌年から「体操」ということになった。それ以前にはわが国ではその呼名すらなかった。それゆえ明治新輸入の

「体育」の概念は今からせいぜい100年以前であったことを考えると、いかにこの時代の影響力が大きかった事を物語っている。この時代を期として一段と発展するのであるが、本論で述べたスウェーデン体操がもっている生理学、解剖学だけでなく社会の近代化にもなる人文および社会の諸科学の基礎の上に、より一層高度の内容をもった体育へと発展していったのである。この研究を通してこの時代の体育思想がいかに秀ぐれ、時代に貢献して来たかを知ることが出来る。

(昭46. 5. 20受理)

### 文 献

- 1) 今村嘉雄・石井トミ訳： ライス世界体育史 (S-30).
- 2) 今村嘉雄： 西洋体育史 (上, 下) (S-32).
- 3) 帆足理一郎： 西洋哲学史 (S-28).
- 4) 今村嘉雄： 体育の歴史 (S-29) p. 17, 24.
- 5) 加藤橋夫外： 体育の世界史 (S-33).
- 6) 水野忠文外： 体育史概説 (西洋, 日本) (S-43) p. 123, 131, 135, 161.
- 7) 猪飼道夫外： 体育科学事典 (S-45) p. 22.
- 8) 日本体育協会： 現代スポーツ百科事典 (S-44) p. 17.